

解題

竹田莊詩話

一卷

田能村孝憲著

田能村孝憲、字は君彝、行藏と稱す、竹田と號す、又雪月書堂、補拙廬、三我主人の號あり、豊後、岡の人なり、家世々藩醫たり、竹田幼にして學を好み、詩を嗜み、醫は其の志に非ず、藩主特に命じて儒者とす、竹田多病なるを以て致仕し、風流自ら娛み、京阪の間に往來し、篠小竹、頼山陽等と交れり、竹田常に本邦人が詩餘を作るもの希なるを恨み、填詞圖譜を著して之を世に公にせり、而して最も畫に巧にして、山水人物花鳥みな明清人の筆意を得たり、畫名海内に鳴る、天保五年八月二十六日歿す、年五十九。

此書は多く同時の作者の詩を録せり、其の標準とする所は宋詩にあり、而して中に多く佳話を載せ、人をして卒讀し易きを恨ましむ。

題竹田莊詩話首

二三年來，予廢輟舊業，愛植花卉，湯藥外，凡百費心勞生之事，不一爲也。於是，一日內分修二課，一則攻詩，二則理花。四時花卉，繞屋雜茂，晨夕涉園，逍遙籬間，色香繽紛，掩映衣袂。其於花也，若有宿緣，然而無偏嗜，無私好，隨觸而睹，隨遇而賞。若夫君子隱逸富貴諸名花，姑置之，乃至凡種庸品之無名無聞，無色無香，花史木譜斥而不收者，亦悅之，視諸前之奇之珍之者，寧有過之莫或不及也。其於詩亦然，無偏嗜，無私好，騷賦選詩，姑置之，李杜王蘇錢劉元白韓柳亦無論也。孟賈之寒瘦，亦悅焉；溫李之富穠，亦悅焉；盧仝怪語，猗鬼搗神，亦悅焉；韓偓豔辭，破籬決藩，暴露無諱，亦悅焉；延及宋元，愛坡翁，愛翁之門四學士，愛聖諭，愛后山，愛范楊尤陸，愛趙吳興，愛楊鐵崖，又

至明清信陽河北滄溟弇州竟陵公安以下錢牧齋王阮亭沈礪士
 袁子才輩無不兼愛併悅也旁在於閩位著六朝五代及金外國朝
 鮮諸子亦采備歸餘之數矣合字內而爲一家混古今而爲一世丈
 室內矮几上彼此邂逅騰騰往來焉故著斯話人異標家別轍不建
 門戶不較是非寧過贊稱無敢譏訾然不屈己而從人又不推己而
 及人也或曰如此則範圍太寬揀選去就不能純一恐失正鵠之所
 嚮矣曰所謂正鵠者唯係作者之所好各從其志可矣梅酸蓼苦各
 有所宜趙輕環肥不妨其美也我以唐爲正乎渠廼以宋爲正渠以
 元爲正乎我廼以明爲正我之所是渠以爲非渠之所帝我以爲奴
 決皆於紙上攘臂於筆端嗚嗚相罵紛紛相爭譬彼舟流不知所屆
 蓋自古至今世之所崇人之所尙詩話詩選之所議論取捨予通覽
 併考知其非已久矣不若世上所稱格調性靈清新諸件公然歸之

其人無敢取私心，插入其間，以擾視聽，而俟後來學者，同聲相應，各分附也。特至其詩之善與不善，則在用心之深與不深，用之之至，冥冥裏有神通焉。其通者，恨難多得耳。客廼稱善，話中儘道琴書酒茶香花。此則藝園之不可須臾廢者，猶編花譜，旁收禽獸蟲魚云。

文化庚午仲冬念七之夜，霜氣劇烈，鑽透牕罅，如線之細，如針之利，小軒獨坐，四更不寐，偶錄此序錄畢，忽憶亭畔蠟梅，今朝始拆一花，或致損傷否。南豐田能村孝憲君彞甫。

竹田莊詩話

南豐 三我主人著

西肥詩人米大夫、秋玉山、藪孤山輩既死、尋
踵崛起者、李紫溟先生、琴山翁最爲巨擘、紫
溟先生、名順、字子友、爲國學祭酒、琴山翁、名
純、字大年、善醫、名鳴海、內、又有大城壺梁翁、
能古文、詩則次之。

紫溟先生天質溫雅、德行純粹、研究理學、而
特好詩、最長五言、造詣平淡、旨趣深蘊、風致
自似王儲、五言古牧牛詞云、牧牛亦可樂、所
樂其奈何、晨乘牛背出、夕叩牛角歌、郊原芳
草遍、無處不經過、黃牛隨東隴、白犢降西阿、

西肥の詩人米大夫、秋玉山、藪孤山の輩既に死して、踵を尋で崛起する者は、李紫溟先生、琴山翁を最も巨擘と爲す、紫溟先生、名は順、字は子友、國學祭酒たり、琴山翁名は純、字は大年、醫を善くし、名海内に鳴る、又大城壺梁翁あり、古文を能くす、詩は則ち之に次ぐ。

紫溟先生、天資溫雅、德行純粹、學理を研究し、而して特に詩を好み、最五言に長ず、造詣平淡、旨趣深蘊、風致自ら王儲に似たり、五言古牧牛詞に云、牧牛も亦樂む可し、樂む所其れ奈何、晨に牛背に乗りて出で、夕に牛角を叩ひて歌ふ、郊原芳草遍く、處として經過せざるは無し、黃牛東隴に隨ひ、白犢西阿を降る、彼れ皆眞性を得たり、吾亦天和に任ず、知らず肥と瘠と、寧ぞ問んや瘦還叱往々沙

彼皆得眞性、吾亦任天和、不知肥與瘠、寧間
 寢還叱、往往飲沙洫、日長溇跡多、無復洗耳
 人、春水澹清波、鑿井云、舊泉日已淺、新居日
 已繁、相助鑿新井、群呼傾一村、晨起乘春鍾、
 息肩已夕昏、豈無累日勞、但願逢其源、重重
 土脈解、稍稍水聲喧、欣然挈瓶汲、兼得灌田
 園、茲邑縱可改、此井常長存、吾當乘化去、聊
 以遺子孫、又有刘禾祈雨索綯等數詞、姑摘
 二首、以充羹墻、又有題壁作極清雅、頃日嘗贈
 余云、日入樵者歸、栖林鳥亦靜、坐待花間月、
 石鼎正煮茗、心與道爲鄰、跡將人異境、只有
 遙寺鐘、傳響度遠嶺、七言古四十六士墓、人
 多誦之、云、冢何纍纍、風何蕭蕭、四十六人一
 時死、天地冥冥鬼神哭、前有權貴、不忍共戴

二

酒に飲み、日長くして溇跡多く、復た洗耳の人無し、春水
 清波澹たり、鑿井に云、舊泉日に已に淺く、新居日に已に
 繁し、相助けて新井を鑿ち、群呼して一村を傾く、晨起し
 て春評を乗り、肩を息へば已に夕昏、豈累日の勞無から
 んや、但願くば其源に逢はん、重々土脈解け、稍々水聲喧
 し、欣然として瓶を挈へて汲み、兼ねて田園に灌くを得
 たり、茲の邑縱ひ改む可きも、此井常に長く存す、吾當に
 化に乗じて去り、聊か以て子孫に遺すべし、と、又禾を刈
 る、雨を祈る、索を綯ふ等の數詞有り、姑く二首を摘し以
 て羹墻に充つ、又題壁の作あり、極めて清雅なり、頃日書
 して余に贈れり、云ふ、日入りて樵者歸り、林に栖ふて鳥
 亦靜なり、坐して花間の月を待ち、石鼎正に茗を煮る、心
 は道と鄰と爲り、跡は人と境を異にす、只、遙寺の鐘有り、
 響を傳へて遠嶺を度ると、七言古四十六士の墓は人多
 く之を誦す、云、冢何ぞ纍々たる、風何ぞ蕭々たる、四十六
 人一時に死す、天地冥々鬼神哭す、前に權貴有り、共に天
 を戴くに忍びず、後に湯鑊有り、之を清冷の泉に比す、白

天、後有湯鑊比之清冷泉、白刃之下道然笑、
 後人拊膺淚潛焉、五言絕、如使王漁洋誦、必
 欣然拍掌謂、海外亦有知音矣、元宅寺云、一
 路連湖水、綿綿垂柳中、欲尋湖上寺、寶鐸響
 春風、眞僧朝出定、雲氣繞前峯、下瞰春潭碧、
 一聲鳴嬾龍、澄潭含物象、虛照未曾疲、搖動
 芙蓉塔、輕風落日時、金峯夕陽云、開窗看落
 日、明滅白雲峯、中有幽人在、應聞箇裡鐘、先
 生今茲年七十三、有江村送春三絕句、格與
 人老、平不說去、自然清高、不落思想、云、送春
 眞似送親知、暮色茫茫淚欲垂、綠樹林中愁
 自語、明年又與百花期、觀楓去歲到山家、相
 約明年來賞花、世事糾紛春已暮、斜陽回首
 望雲涯、落花飛絮總別愁、衡門空鎖暮江頭、

竹田莊詩話

刃の下道然として笑ふ、人膺を拊後ち涙潛焉たりと、五
 言絶如し王漁洋をして誦せ使めは、必ず欣然として掌を
 拍ちて謂はん、海外亦知音有り、と、元宅寺に云、一路湖水
 に連る、綿々たり垂柳の中、湖上の寺を尋ねんと欲すれ
 ば、寶鐸春風に響く、眞僧朝に定を出で、雲氣前峯を繞る
 下し、瞰る春潭の碧、一聲嬾龍を鳴す、澄潭物象を含み、虚
 照未だ會て疲れず、搖動す芙蓉塔、輕風落日の時、金峯夕
 陽に云、を窗開き落日を見る、明滅す白雲の峯、中に幽人
 の在る有り、應に箇の裡の鐘を聞くべしと、先生今茲年
 七十三、江村に春を送る三絶句有り、格、人と老ひ平々説
 き去りて、自然に清高にして思想に落ちず、云、春を送る
 は眞に親知を送るに似たり、暮色茫茫々として淚垂れん
 と欲す、綠樹林中愁ひて自ら語る、明年又た百花と期せ
 ん、楓を觀て去歲山家に到り、相約す、明年來つて花を賞
 せんと、世事糾紛春已に暮れ、斜陽首を回して雲涯を望
 む、落花飛絮總べて別愁、衡門空く鎖さず暮江の頭、燈前
 惟だ灘聲の急なる有り、春光を送り盡して夜未だ休せ

燈前惟有灘聲急、送盡春光夜未休、又六言
 絕不減錢劉春晚云、落花飛絮春暮、斜照殘
 霞晚晴、平水鏡中鳥浴、長橋畫裏人行、旁善
 和歌、海以西一時罕、見其比橋千蔭本居宣
 長輩、千里唱酬、推重欽獎、寬政中詠百首
 傳入、禁掖、忝歷覽觀、上願侍臣曰、不圖田舍
 能出斯珍矣、肥人相傳以爲榮云。

琴山翁資性英邁、作詩不能拘拘乎字句間、
 經典佛籍俗語俚諺、信手拈出、錯雜成章、而
 一氣直下、奔逸雅健、類陸放翁、蓋在肥人、大
 開別面、七律春盡山莊卽事云、我是人間度
 外人、飄然獨往自由身、牀無俗客唯高臥、食
 有園葵不厭貧、鵲哭鶯歌歸去日、花殘柳暗
 老來春、鄰邨酒美須供醉、重對嵐光樹色新、

す、又六言絶も錢劉に減せず、春晚に云、落花飛絮春暮、
 斜照殘霞晚に晴る、平水鏡中鳥浴し、長橋畫裏人行くと、
 旁ら和歌を善くし、海以西一時比を見ると罕なり、橋の
 千蔭本居宣長の輩、千里唱酬し、推重欽獎す、寬政中詠す
 る所の百首傳へて禁掖に入り、忝くも覽觀を歴たり、上
 侍臣を顧みて曰、圖らざりき田舍に能く斯の珍を出さ
 んとはと、肥人相傳へて以て榮と爲すと云ふ。

琴山翁資性英邁にして、詩を作るに、字句の間に拘々た
 る能はず、經典佛籍俗語俚諺、手に信せて拈出し、錯雜章
 を成す、而して一氣直下、奔逸雅健、陸放翁に類す、蓋肥人
 に在て大に別面を開けり、七律春盡山莊卽事に云、我は
 是れ人間度外人、飄然獨往自由の身、牀に俗客無く
 唯高臥、食に園葵有り貧を厭はず、鵲哭鶯歌ひ歸り去
 る日、花殘し柳暗く老ひ來る春、鄰邨酒美にして須らく
 醉に供すべし、重ねて嵐光樹色の新なるに對す、又春盡
 日偶作あり云、昨風機に見る百花の開くを、今雨還た聞
 く杜宇の催すを、坐は僧鞋に似て空しく兀々、觀は佛界

又、有春盡日偶作云、昨風纔見百花開、今雨
 還聞杜宇催、坐似僧籠空兀兀、觀如佛界、只
 恢恢、清遊願足、酬過去、熱睡緣堪、結未來、貪
 酒耽、詩禪亦會、乃公偏自笑、多才、山莊初夏
 云、流光不獨愛春花、更愛園林綠葉加、昨夢
 驚兼鵬共別、今遊月與水尤佳、青繪繪雪涼
 生、扇、玉鼎焚香篆、透紗、賞事無過初夏景、風
 情故在、羨新茶、答余一律亦足想見其人云、
 吾寧僻住紫溟陽、求道不弛又不張、開此二
 千年眼目、傳彼一萬首和方、酒唯任取、時時
 醉、茶是愛分品、品香、自笑雖非湖海士、未除
 豪氣臥高牀、時翁著述二千年眼目、刻始竣、
 又東都政府有令、進其所輯和方一萬首、要
 賜金若干、

竹田莊詩話

の如く只、恢々、清遊の願を過去に酬ゆるに足り、熱睡の
 縁は未來を結ぶに堪へたり、酒を貪り詩に耽り禪亦會
 す、乃公偏に自ら多才を笑ふ、山莊初夏に云、流光獨り春
 花を愛するのみならず、更に愛す園林綠葉の加はるを、
 昨夢驚は鵬と共に別れ、今遊月は水と尤も佳なり、青繪
 雪を繪いて涼扇に生じ、玉鼎香を焚きて篆紗に透る、賞
 事は初夏の景に過ぐる無く、風情故に新茶を煮るに在
 り、と余に答ふる一律も亦其の人を想見するに足る、云、
 「吾寧ろ紫溟の陽に僻住するも、道を求めて弛せず又張
 せず、此の二千年の眼目を開き、彼の一萬首の和方を傳
 ふ、酒は唯取るに任ず、時々の醉茶は是れ分を愛す品々
 の香自ら笑ふ湖海の士に非ずと雖、未だ豪氣を除かず
 高牀に臥すと、時に翁二千年眼目を著述し、刻始めて竣
 る、又東都政府、令あり、其の輯むる所の和方一萬首を進
 めしめ、金若干を褒賜す。」

翁受業吉益東洞、以古疾醫自任、殆七十年、著書等身、海內裹糧至者、歲亡慮數十人、旁及琴書茶經花史香譜、莫不精曉、著有琴山欵設四譜、故每詩言此四者、輒具妙詮、眞理或他人借之點飾句面、遂不能及也、然世唯知善醫、而知其風流者絕少、故舉六清真人說以證平生韻事云、

六清真人、翁之別號、說曰、清晨盥漱、灑掃堂室及庭內、次洗瓶、插花、清目、次拂拭香爐、凡案、斐沈檀一片、清鼻、次汲水、潔淨諸器、品茶煎之、或抹茶點之一椀、至三椀、清胸膈、口舌、次調古琴、彈南薰滄浪二曲、各一再行、清耳而後坐、書齋讀聖賢之書、以清心、自號六清真人、又曰清福道人、香房茶寮花軒琴所、竝

翁業を吉益東洞に受け、古疾醫を以て自ら任ず、殆んど七十年、著書等身、海内糧を裹みて至る者、歳に亡慮數十人、旁はら琴書茶經花史香譜に及ぶまで、精曉せざる莫し、著に琴山欵設四譜あり、故に詩に此の四者を言ふ毎に、輒ち妙詮眞理を具す、或は他人之を借りて句面を點飾すれば、遂に及ぶこと能はざるなり、然れども世唯、醫を善くするを知りて、其風流を知る者、絶えて少し、故に六清真人の説を擧げて、以て平生の韻事を證すと云ふ。

六清真人は翁の別號なり、説に曰く、清晨盥漱して堂室及び庭内を灑掃し、次に瓶を洗ひ花を挿み目を清ふす、次に香爐几案を拂拭し、沈檀一片を焚き鼻を清くす、次に水を汲み諸器を潔淨にし、茶を品し之を煎し、或は茶を抹し之を點じ、一椀より三椀に至り、胸膈口舌を清くす、次に古琴を調し、南薰滄浪の二曲を彈じ、各一再行し、耳を清くす、而る後書齋に坐し、聖賢の書を讀み、以て心を清くす、自ら六清真人と號す、又清福道人と曰ふ、香房茶寮花軒琴所、竝に諸友有り、因て併せ命ずるに清を以てすと云ふ、香房三友は、沈香を澆清と曰ひ、檀香を奇

有諸友、因併命以清云、香房三友、沈香曰、澹清、檀香曰、奇清、合香曰、暖清、茶寮二友、煎茶曰、妙清、點茶曰、綠清、花軒十二友、春花三、迎春曰、黃清、桃曰、天清、海棠曰、豔清、夏花三、芍藥曰、麗清、石榴曰、紅清、蓮曰、妍清、秋花三、桔梗曰、紫清、秋海棠曰、嬌清、菊曰、逸清、冬花三、寒菊曰、幽清、水仙曰、真清、梅曰、韻清、琴所三友、琴曰、雅清、南薰曰、聖清、滄浪曰、賢清、天明丙午春、紫溟先生及諸子分賦六清、哀然成帙、翁亦有七古一篇、韻致可挹、惜篇太長、不及備載。

題畫小絕、宋元以後、冲澹清逸、別是一種、倪雲林、文衡山、唐解元、董玄宰、最爲曠遠、琴山翁頗得其趣、清江獨釣云、獨釣蘆花淺水秋、

清と曰ひ、合香を暖清と曰ふ、茶寮の二友は、煎茶を妙清と曰ひ、點茶を綠清と曰ふ、花軒十二友は、春花三つ、迎春を黃清と曰ひ、桃を天清と曰ひ、海棠を豔清と曰ふ、夏花三つ、芍藥を麗清と曰ひ、石榴を紅清と曰ひ、蓮を妍清と曰ふ、秋花三つ、桔梗を紫清と曰ひ、秋海棠を嬌清と曰ひ、菊を逸清と曰ふ、冬花三つ、寒氣を幽清と曰ひ、水仙を真清と曰ひ、梅を韻清と曰ふ、琴所三友は、琴を雅清と曰ひ、南薰を聖清と曰ひ、滄浪を賢清と曰ふ、天明丙午の春、紫溟先生及び諸子分ちて六清を賦し、哀然として帙を成す、翁も亦七古一篇あり、韻致抱む可し、惜むらくは篇太だ長くして備載するに及ばず。

題畫の小絶は、宋元以後、冲澹清逸、別に是れ一種なり、倪雲林、文衡山、唐解元、董玄宰、最も曠遠と爲す、琴山翁頗る其の趣を得たり、清江獨釣に云、獨り釣る蘆花淺水の秋、生涯の心事扁舟に寄す、孤村十里清江の暮、遮莫^{さもあらば}れ游魚

按有疑在
之恥

生涯心事寄扁舟、孤村十里清江暮、遮莫游
魚不上鉤、春樹人家云、雨後青山入、望新、千
村萬落一時春、茅亭別有烟嵐裏、綠樹陰陰
不見人、溪邨夜雨云、蕭蕭雨色一溪涯、獨汲
清泉坐煮茶、半夜西窗幽夢後、孤燈點點幾
人家。

明和中肥前國長崎鎮有妓櫻路者、聲色俱
妍、清人龔允讓相得甚洽、教詞令、一授了了、
豔楚動聽、允讓驚詫曰、吾杭州妓稱善歌者
不及也、西歸日臨別、悽惋、扇頭書二絕贈之、
翠山翁遊鎮聞其事、特邀見、因徵歌、初不肯、
既而唱畢、悲悼欲絕、把詩扇出示、紙墨新鮮
尙如故、詩云、浮雲流水兩情聯、曾許貞心待
十年、早識歡情難再卜、有緣不若竟無緣、斑

の釣に上らざるを、春樹人家に云、雨後の青山望に入り
て新なり、千村萬落一時の春、茅亭別に烟嵐の裏に有り、
綠樹陰々人を見ず、溪邨夜雨に云ふ、蕭々たる雨色一溪
の涯、獨り清泉を汲み坐して茶を煮る、半夜西窗幽夢の
後、孤燈點々たり幾人家。

明和中肥前の國長崎鎮に妓櫻路といふ者あり、聲色俱に
妍なり、清人龔允讓相得て甚洽し、詞令を教ゆ、一授して
了々、豔楚聽を動かす、允讓驚詫して曰く、吾杭州の妓、善
歌と稱する者も及ばざるなりと、西歸の日別に臨み悽
惋し、扇頭に二絶を書して之に贈る、翠山翁鎮に遊び其
事を知き、特に邀へ見る、因て歌を徵す、初め肯せず、既に
して唱へ畢り、悲悼して絶せんと欲す、詩扇を把り出し
示す、紙墨新鮮にして尙ほ故の如し、詩に云、浮雲流水兩
情聯り、曾て許す貞心十年を待つを、早く歡情の再び卜
し難きを識らば、有緣は若かず、竟に無緣なるに、斑管新
詩別愁を誄す、多情敢て信ぜんや、青樓に屬せんとは儂

管新詩誌別愁多情敢信屬青樓、儘心若體
蕭郎意、珍重花枝莫浪投、允讓字與讓、恪中
子、克賢弟也、父兄俱通商、崎港頗善書、涉文
詞、允讓性喜華侈、衣帽鮮麗、時必更換、日以
爲常、琴山翁爲余言如此。

長崎鎮、華夷通交轉貨處、故土民富饒、家給人足、治平日久、漸嚮文教、加之清商內崇尙風雅、善詩若書畫者、往往航來、沈燮菴李用雲、沈銓、伊孚九輩、不遑、摟指、故餘習之所、浸染、詩書畫、竝有別致、冠山陽谷之詩、玄侗陶齋之書、慶山熊斐之畫、早著名聲矣、余遊鎮、留僅一旬、所知唯是四人、曰迂齋、東溪、南陵、石崎士齊、而南陵未及讀、其作、士齊名融思、工畫、爲鎮之書畫、目利職、蓋目利、國語謂鑿

が心若し蕭郎の意を體せば、花枝を珍重して浪なみだに投ずる莫れと、允讓字は與讓、恪中子克賢の弟なり、父兄俱に崎港に通商し、頗る書を善くし、文詞に涉る、允讓性華侈を喜み、衣帽鮮麗、時に必ず更換す、日に以て常と爲す、琴山翁余が爲に言ふこと此の如し。

長崎鎮は、華夷通交轉貨の處なり、故に土民富饒、家給人足り、治平日久く、漸く文教に嚮ふ、之に加ふるに清商内、風雅を崇尙し、詩若くは書畫を善くする者、往々航し來る、沈燮菴李用雲、沈銓、伊孚九の輩、摟指に遑あらず、故に餘習の浸染する所、詩書畫竝に別致有り、冠山陽谷の詩、玄侗陶齋の書、慶山熊斐の畫、早に名聲を著はす、余鎮に遊び、留ること僅に一旬、知る所は、唯是の四人のみ、曰く迂齋、東溪、南陵、石崎士齊、而して南陵は未だ其の作を讀むに及ばず、士齊名は融思、畫に工にして、鎮の書畫、目利職たり、蓋、目利は、國語鑿定を謂ふ、其職専ら清商の齋す所の書畫、品格眞贋價直の高下を識別するを主るなり、詩は其長する所に非ず、故に錄せず。

定其職專主識別清商所齎書畫品格眞賤
價直高下也詩非其所長故不錄

迂齋姓吉村名正隆深通經史詩文詞令莫
所不善最爲鎮之後勁惜年未五十卒矣賦
落日高樓一笛風云森山凝紫淡煙浮斷笛
輕風響未收返照客歸花外路數聲誰倚水
邊樓餘梅吹落催新別殘柳折來喚舊愁寄
語高人無重奏滄江萬里有孤舟偶作云江
城九日晚寒增兀坐蕭閒類野僧世味澹然
如嚼蠟道心眞爾似凝冰黃花將老題難了
紫蟹初肥醉易乘更有風光催獨往遙山近
水試烏藤又獲小詞辭致悽麗亦當行家言
今錄二首賀石崎士齊花燭云雙調相見歌雙鴻
離離和鳴見堅冰合盞之儀二姓光榮連理

迂齋姓は吉村名は正隆深く經史に通じ詩文詞令善せ
ざる所莫し最も鎮の後勁たり惜むらくは年未だ五十
ならずして卒す落日高樓一笛の風を賦して云暮山紫
を凝らし淡煙浮ぶ斷笛輕風響未收ならず返照客は歸
る花外的路數聲誰か倚る水邊の樓餘梅吹き落して新
別を催ふし殘柳折り來て舊愁を喚ぶ語を寄す高人重
ねて奏すること無れ滄江萬里孤舟有り偶作に云江城
九月晚寒増し兀坐蕭閒野僧に類す世味澹然として蠟
を嚼むが如く道心眞に爾く水を凝すに似たり黃花將
に老ひんとして題了し難く紫蟹初めて肥えて醉乘し
易し更に風光の獨往を催す有り遙山近水烏藤を試む
又小詞を獲たり辭致悽麗にして亦當行家の言なり今
二首を録す石崎士齊の花燭を賀するに云雙調相見歌雙鴻
離々和鳴して見る堅冰合盞の儀二姓光榮連理帶合
歡扇兩花燈雪を咏じ蘭を頌し才子佳人に配す志村君
の仙臺府に歸るを送る云天賦芳草は烟の如く花泥
と作る蒼々たる夏木子規啼く故園萬里雲鬢塵征客終

帶合歡扇兩花燈、咏雪頌蘭才子配、佳人送、
志村君歸仙臺府云、陽結芳草如烟化作泥、
蒼蒼夏木子規啼、故園萬里雲霧屬、征客終
宵夢往來、是會日即離時、悽然語別使人
悲、君歸鞅鞶分江處、我在扶桑西復西。

東溪姓松浦名陶、弘綜、群書、工詩能畫、以至
孝聞、年五十、其母尙存、晨昏定省不離膝下、
親故往來亦殆謝絕焉、清人王雲巢愛其雪
水煎茶歌、西歸日請書之、裝潢攜去、歌云、風
雪三四日、孤屋江山隈、園徑無絲摘、菜蔬蓬
門自絕客往來、積雪深深一二尺、朝昏疑坐
白銀臺、瑩階瓊樹玲瓏境、不用鶴驚故徘徊、
物候誰辨年序改、春光纔在插緋梅、此時呵
手先取雪、大盤小盤數十枚、明珠莫比鮫人

雪夢往來す、是會日即ち離時、悽然別を語り人をして
悲ましむ、君は鞅鞶分江の處に歸り、我は扶桑の西復た
西に在り。

東溪、姓は松浦、名は陶、弘く群書を綜べ、詩に工みに畫を
能くし、至孝を以て聞ゆ、年五十、其の母尙ほ存す、晨昏定
省、膝下を離れず、親故往來亦殆んど謝絶す、清人王雲巢
其の雪水煎茶の歌を愛し、西歸の日請ふて之を書し、裝
潢して携へ去る、歌に云ふ、風雪三四日、孤屋江山の隈、園
徑菜蔬を摘むに縁無く、蓬門自ら絶す客の往來、積雪深
々たり一二尺、朝昏疑ふ白銀臺に坐するかと、瑩階瓊樹
玲瓏の境、用ひず鶴驚故に徘徊するを、物候誰か辨ぜん
年序の改まるを、春光纔に緋に挿む梅に在り、此時手に
呵して先づ雪を取り、大盤小盤數十枚、明珠、鮫人の贈に
比する莫く、玉斗何ぞ亞父の擲くを、煩はさん、之を石鼎
の中に投すれば、悉爐活火紅なり、消散漸く見る雪眼を
生ずるを、閑室既に聞く松風起る、松風雪眼頻りに相誇

贈玉斗何煩。亞父摧投之石鼎中。寒爐活火
 紅消散漸見生蟹眼。閑室既閒起松風。松風
 蟹眼頻相誇。卽下去年精製茶。香兮色兮始
 清絕。味壓羊羔笑業家。平生幾品處處泉。井
 池澗溪巖穴邊。君不見石父終入晏嬰舍。子
 期善識伯牙絃。茶之於雪猶如是。仰謝青帝
 爲余憐。豈憶梁園賦。豈羨黃竹篇。對雪飲雪
 歌。白雪鴻漸滋樂亦自然。卻恨東風解冰後。
 茶水難伊花鳥前。雲巢別號理菴。杭州人。性
 恬淡好禪。不殖貨利。不近脂粉。終日樓居。案
 頭所貯。唯佛經兩三函耳。

海西歸臥既三歲矣。頃閱敗篋。獲栲亭先生
 及社友詩稿數首。且讀且感。追想前游。尙如
 昨日。而石齋長逝。墓木將拱。不覺愴然淚下。

り、卽ち下だす去年精製の茶、香や色や始めて清絶味は
 羊羔を壓して業家を笑ふ、平生幾たびか品す處々の泉、
 井池澗溪巖穴の邊、君見ずや石父終に晏嬰か舍に入り、
 子期善く伯牙の絃を識る、茶の雪に於ける猶ほ是の如
 し、仰ぎ謝す青帝余の爲めに憐むを、豈憶はんや、梁園の
 賦、豈に羨まんや、黃竹の篇、雪に對し雪を飲で、白雪を歌
 ふ、鴻漸か滋樂亦自然、卻て恨む東風氷を解て後、茶水併
 せ難し、花鳥の前と、雲巢、別に理菴と號す、杭州の人、性
 活淡にして禪を好み、貨利を殖せず、脂粉を近けず、終日
 樓居し、案頭貯ふる所は、唯佛經兩三函のみ。

海西歸臥既に三歲なり、頃ぐる敗篋を開して栲亭先生及
 び社友の詩稿數首を獲たり、且つ讀み且つ感じ、前游を追
 想するに、尙昨日の如し、而して石齋は長逝し、墓木將に
 拱ならんとす、覺へず愴然として涙下る、蓋諸友平生の

蓋諸友平生傑作極富、斯卷所錄僅止、麓中蠹耗之餘、讀者若欲偉觀、俟他日就其本集而抄出焉。

先生作詩必用實事、不著虛語、一日社集、同咏殘楓、偶有家人來報云、後園歎冬初茁矣、卽賦云、一藤無伴訪山家、霜冷疎林誰駐車、不分前溪經昨雨、纔看數點掛殘霞、輕風聊作詩人地、衰草乍裝樵徑花、物候眞成流水似、樹間已茁歎冬芽、大抵此類、又性惡酒、至侍坐者雖善飲、亦承其意、陽稱下戶、故集中無一語之面諛、麴生嘗作反將進酒一篇、深規沉湎于醉鄉者、坡公素不能飲、然猶自云、喜人飲酒、如先生可謂古來文人之所未曾有也。

傑作極めて富めり、斯の卷に録する所は、僅に麓中蠹耗之餘に止る、讀者若し偉觀を欲せば、他日其の本集に就いて抄出するを俟て。

先生詩を作る、必ず實事を用ひて、虚語を著けず、一日社集同じく殘楓を咏す、偶家人有り來り報じて云、後園の歎冬初めて茁すと、卽ち賦して云、一藤伴無く山家を訪ふ、霜冷にして疎林誰か車を駐めん、不分前溪昨雨を経て、纔に看る數點殘霞掛るを、輕風聊作す詩人の地、衰草乍も裝ふ樵徑の花、物候眞成に流水に似たり、樹間已に茁す歎冬芽と、大抵此の類なり、又性酒を惡む、侍坐の者善く飲むと雖、亦其の意を承け、陽に下戸と稱するに至る、故に集中一語の麴生に面諛する無し、嘗て反將進酒の一篇を作り、深く醉郷に沉湎する者を規す、坡公素より飲む能はず、然ども猶ほ自ら云、人の酒を飲むを喜ぶと、先生の如きは、古來文人の未だ會て有らざる所なりと謂ふべし。

京北、大原矢瀨諸村、土風淳古、頂髮不剃、專供王役、其婦女常時首戴東薪雜花及梯子砧杵之類、鬻之入市、好事者作圖傳之、先生特長咏物、凡京城内外所有題詩殆遍、一日有人攜來斯圖、需題其上、即賦三絕、與之、蓋始咏此女也、云、濕薪緊束一團強、頭上輕輕攀作行、一曲山歌妹和姊、插花沿路蝶趨香、契郎家在天台下、世世采樵住、白雲婦姑戴新趨陌上、未慣采桑賺使君、荆釵草屨木綿裙、三市和花賣、錯薪怪他樓上紅裙女、併取一身賣與人、自注、契郎讀如傑刺、矢瀨人自稱曰契郎。

或跋先生書曰、黃太史云、雖書字巧拙在人、要須年高手硬、心意閑淡、乃入微耳、今先生

京北の大原矢瀨諸村の土風は淳古にして、頂髮剃らず、専ら王役に供す、其婦女常時首に東薪雜花及び梯子砧杵の類を戴き、之を鬻ぎ市に入る、好事の者圖を作り之を傳ふ、先生特に咏物に長ず、凡京城内外に有る所、題詩殆ど通し、一日人有り斯の圖を携へ來り、其の上に題せんことを需む、即ち三絶を賦して之に與ふ、蓋始めて此の女を咏するなり、云、濕薪緊束一團強、頭上輕々攀けて行を作す、一曲の山歌、妹姊に和し、花を挿み路に沿ひ蝶香を趁ふ、契郎の家は天台の下に在り、世々采樵し白雲に住む、婦姑薪を戴き陌上に趨き、未だ慣れず桑を采り使君を賺すを、荆釵草屨木綿裙、三市花に和して錯薪を賣る、怪む他の樓上紅裙の女、一身を併取して人に賣與すと、自注に、契郎讀んで傑刺の如し、矢瀨の人、自ら稱して契郎と曰ふ。

或ひと先生の書に跋して曰く、黃太史云ふ、書字の巧拙は人に在りと雖、要は須らく年高く手硬くして、心意閑淡なるべし、乃ち微に入るのみと、今先生の書實に以て其

之書實有以踐其境、余猶謂豈唯書哉、詩亦
 有然、蓋先生初作富贍新巧、近日混化、稍爲
 冲澹蒼老、今揭數首證之、五律、早梅云、江梅
 春已至、水澤腹猶堅、有人攜送我、聞香意欲
 仙、臙瓶隨意挿、骨格自然妍、含笑紅爐側、依
 微帶暖煙、七律、秋日郊行云、百事一拋只討
 閑、早間散策晚間還、浪過村落途常錯、恣領
 風煙天不慳、自笑紅塵長挿脚、纔垂白首始
 怡顏、邑雞不慣生人到、膊膊驚飛上屋山、屐
 齒乘秋仍躍然、縱游自許小神仙、疎雲嶺上
 初橫雁、落木林頭不庇蟬、貪勝細評山險易、
 攜筇且品景幽妍、不知何日領其要、每箇峯
 頭住一年、錢菊云、黃恨白愁葉也、蒼猶思九
 日、獨恣妍、山居已及開爐月、霜圃正當種麥

竹田莊時話

の境を識む有り、余迺ち謂ふ、豈唯に書のみならんや、詩
 も亦然る有り、蓋、先生の初作は富贍新巧にして、近日は
 混化し、稍冲澹蒼老を爲す、今、數首を掲げ之を證す、五律、
 早梅に云、江梅春已に至り、水澤腹猶堅し、人有り携て我
 に送る、香を聞き、意仙ならんと欲す、臙瓶隨意に挿み、骨
 格自然に妍なり、笑を含む、紅爐の側、依微として、暖煙を
 帶ぶ、七律、秋日郊行に云、百事一抛し、只閑を討ね、早間策
 を散じて、晚間に還る、浪に村落を過ぎ、途常に錯り、恣に
 風煙を領して、天慳まず、自から笑ふ、紅塵長く、脚に挿む
 を、纔に白首を垂れ始めて、顔を怡ばす、邑雞慣れず、生人
 の到るに、膊々驚き飛んで、屋山に上る、屐齒秋に乗じて
 仍ほ躍然、縱游自ら許す、小神仙、疎雲嶺上初めて、雁を横
 たへ、落木林頭蟬を庇はず、勝を貪りて、細に評す、山の險
 易筇を携へて、且つ品す、景の幽妍、知らず、何れの日か其
 の要を領し、每箇峯頭住すること一年せん、菊に侈する
 に云、黃恨み白愁ひ葉也、た蒼す、猶ほ思ふ、九日獨り、妍を
 恣にせんと、山居已に及ぶ、開爐の月、霜圃正に當る、種麥
 の天、何を以て饑を療せん、悴顔の客、由無く、酒に泛ぶ、野
 人の筵、籬根懸に、芳根に向つて、囁す、來歲合に未了の緣
 を償ふべしと、七月朔、晨起涼甚し、前宵の大雷雨曉に至

天、何以瘵饑悴顏客、無由泛酒野人筵、離根
 懇向芳根爛、來歲合價未了緣、七月朔晨起
 涼甚、前宵大雷雨至、曉晴云、一夜迅雷雜雨
 聲、起來初日破雲生、龜游行潦頻尋餌、竄立
 屋山時喚晴、殘炎失權喜秋早、新涼如藥覺
 身輕、腸乾悶悶過三伏、偏慰今朝詩思清、七
 絕、雪竹云、溪竹高低雪壓平、層層如浪聽無
 聲、一枝偶被風吹起、寒翠逼人分外清、短垣
 爭、彈青鸞尾、一夜變成白玉毛、天公無意爭
 閑氣、聊試此君苦節高。

先生有一男一女、男則石齋也、名修、字士業、
 能詩善書、竝有家風、今檢遺稿、散逸殆盡、僅
 記卽事一絕、云、窓塵拭淨坐朝陽、好在茶甌
 與筆牀、黃庭臨罷博山冷、爲炷水沈謝墨皇、

りて晴る、云、一夜迅雷雨聲に雜はり、起來初日雲を破り
 て生ず、龜は行潦に遊びて頻りに餌を尋ね、鳶は屋山に
 立ちて時に晴を喚ぶ、殘炎權を失ひ秋の早きを喜び、新
 涼藥の如く身の輕きを覺ゆ、腸乾きて悶々三伏を過ぎ、
 偏に慰す今朝詩思の清きを、七絶雪竹に云、溪竹高低雪
 壓して平なり、層々浪の如く聽くに聲無し、一枝偶風に
 吹き起され、寒翠人に逼りて分外清し、短垣争ひ彈す青
 鸞尾、一夜變じて白玉毛と成る、天公意無し閑氣を争ふ
 に、聊か此の君苦節の高きを試むと。

先生一男一女あり、男は則ち石齋なり、名は修、字は士業
 詩を能くし書を善くす、竝に家風あり、今遺稿を檢する
 に、散逸殆んど盡き、僅に卽事の一絶を記す、云、窓塵拭ひ
 淨めて朝陽に坐し、好在なり茶甌と筆牀と、黃庭臨し罷
 んで博山冷かなり、爲に水沈を炷して墨皇に謝す、又早
 行の一聯を記す、亦佳なり、同賦の者一時筆を開く、云、星

又記早行一聯亦佳、同賦者一時閣筆云、星
尙兩三點、雞已東西通。

閑齋亦詩壇之老手、格律清警、初學於攝人
萬子琴、晚居岡崎、遊華陽社最久矣、未得全
稿、祇錄其曩日記誦春寒一律云、司憲行、令
令何私、驅使東風、作暴吹、無日不陰、知幾日、
有時驟暖、豈多時、誰暖瓶梅、溫斂玉、爭鬪園
柳、展愁眉、慙慙黃鳥、專春事、宛轉弄聲、雪裏枝。
梅所讓職、其弟致仕、寓居京師、以授生徒、爲
業、故其歲晚三韻律云、未老已爲不仕身、歲
寒風雪守清貧、無錢尙是買琴硯、有弟時能
餉米薪、背世自呼狂道士、華陽仙窟日尋眞、
辜負排家錢穀閑、圖書蝕盡有餘餐、一叢吟
社、揀才結半歲、旅遊做夢看、慣俗近纒黃絮

は尙ほ兩三點、鶏は已に東西に通すと。

閑齋も亦詩壇の老手にして、格律清警なり、初め攝人萬子琴に學び、晩に岡崎に居り、華陽社に遊ぶ最久し、未だ全稿を得ず、祇其の曩日記誦せる春寒の一律を録す、云、司憲令を行ひ令何ぞ私なる東風を驅使して暴吹を作す、日として陰らざる無く知んぬ幾日ぞ、時有りて驟に暖なる豈多時ならんや、誰か瓶梅を暖して斂玉を温め、争ふて園柳を鬪して愁眉を展へん、慙慙にす黄鳥の春事を專にし、宛轉として聲を弄す雪裏の枝。

梅所、職を其の弟に譲り、致仕して京師に寓居す、生徒に授くるを以て業と爲す、故に其歲晚の三韻律に云ふ、未だ老ひす已に不仕の身と爲り、歲暮くして風雪清貧を守る、錢無く尙是れ琴硯を買ひ、弟有り時に能く米薪を餉る、世に背いて自ら呼ぶ狂道士、華陽の仙窟日に眞を尋ぬ、辜負す排家錢穀の閑、圖書蝕盡して餘餐有り、一叢の吟社才を揀んで結び、半歳の旅遊かと做して看る、俗に慣れて近ごろ纒ふ黄絮帽梅を尋ねて覺えず、瘦肩の寒

帽、尋梅不覺瘦肩寒、時有優人李冠者、服茶褐衣、色甚清妍、彼都人士、一時競效、呼爲李冠褐、故有慣俗句。

丁卯冬善琴者玉堂老人、與余始相見於大阪府之持明院、同寢食殆四十日、時年六十餘、毛髮盡白、鬚長數寸、而猶有童顏、歌聲圓滑、齒豁不妨音、亦奇士也、特好酒、醉則賦小詩、每首輒用琴字、又作小景山水、皴擦甚動、俱不入格、頗以勝趣勝、記醉後一絕云、倦酒倦琴倚檻時、滿園祇樹雪華飛、雪華箇箇風吹去、不染琴絲染髮絲、余偶爲客填詩餘數首、老人適配譜諧之、其音嗚咽悽惋、左右聳聽、今錄小令一闕、長相思云、紫燕飛白燕飛、飛上紗窓越女機、雙雙無別離、天不非人不

きをこと、時に優人李冠といふ者あり、茶褐衣を服し、色甚だ清妍なり、彼の都の人士一時競ひ倣ふ、呼で李冠褐と爲す、故に俗に慣ふの句あり。

丁卯の冬、善琴者玉堂老人、余と始めて大阪府の持明院に相見、寢食を同うすること殆んど四十日、時に年六十餘、毛髮盡く白く、鬚長きこと數寸にして、猶童顏有り、歌聲圓滑、齒豁なれども音を妨げず、亦奇士なり、特に酒を好み、醉へば則ち小詩を賦し、每首輒ち琴の字を用ふ、又少景山水を作る、皴擦甚勤めて、俱に格に入らず、頗る勝趣を以つて勝る、醉後の一絶を記す、云、酒に倦み琴に倦み、檻に倚る時、滿園の祇樹雪華飛ぶ、雪華箇々風吹き去り、琴絲を染めず、髮絲を染む」と、余偶客の爲に詩餘數首を填む、老人酒ち譜を配し、之を諧ふ、其音嗚咽悽惋、左右聽を聳やかす、今、小令一闕を録す、長相思云、紫燕飛び、白燕飛び、飛び上る紗窓越女の機、雙々として別離無し、天非ならず、人非ならず、只是れ優が情思の微なるに因る、檀郎未だ知るを得ずと、爾後萍梗速く離れ、音間終に絶す、東譜の張竹石山人徵嘗て玉堂詩集一卷を輯め、刻して世に傳ふ。

非、只是因儂情思微、檀郎未得知、爾後萍梗
遠離、音問終絕矣、東讚張竹石山人徽、嘗輯
玉堂詩集一卷、刻傳于世。

頃聞小説、載袁子才隨園築墳事、風情曠恢、
最爲可喜、云、錢塘袁太史子才僑寓金陵、家
有隨園、備極花木山池樓臺之勝、其假山下
築一墳、墳四周、透以桃花、春時紅雨繽紛、點
綴墳間、碧草芊綿、悽豔動人、於石上鐫句云、
不飲、但從山下看、桃花深處有孤墳、曠達中、
情一往而深矣、近輩下子弟競尙隨園詩話、
一時諷誦、靡然成風、書肆價直爲之頓貴、至
抄每卷中全篇收載者、而刊布焉、蓋子才選
詩、字平而意巧、句澹而情樸、匪宋人之義理、
譜以唐人之格調、故易入人心脾也。

竹田莊詩話

頃ごろ小説を聞するに、袁子才隨園が墳を築く事を載
す、風情曠恢、最も喜ぶ可しと爲す、云ふ、錢塘の袁太史子
才、金陵に僑寓す、家に隨園あり、備に花木山池樓臺の勝
を極む、其假山の下に一墳を築き、墳の四周透らすに桃
花を以つてす、春時紅雨繽紛として墳間を點綴し、碧草
芊綿悽豔として人を動かす、石上に於て句を鐫りて云
ふ、飲せずして但山下從り看る、桃花深き處に孤墳有り、
と、曠達中、情一往して深し、近ごろ輩下の子弟競ふて隨
園詩話を尙び、一時諷誦し、靡然として風を成す、書肆の
價直之が爲めに頓に貴し、每卷中全篇收載の者を抄して
刊布するに至る、蓋、子才詩を選ぶ、平平にして意巧、句澹
にして情樸、宋人の義理に匪し、譜するに唐人の格調を
以てす、故に人の心脾に入り易し。

又載金聖歎死於非命事、狀頗狂勃、或謂小說家多放誕、誣罔不足信也、其或然、姑錄以俟、後考云、金聖歎所著解唐詩五七言律、無論義理、必割然中分、上四句爲前解、下四句爲後解、穿鑿乖謬、當時人戲稱爲腰斬唐詩、一日行於京師東四牌樓、偶內逼、遂於街心、棍袴遺矢焉、其地車馬交馳、見者靡不駭怪、坊卒怒鞭之、金亦大怒、侈口毒罵、致達金吾處、拘訊之、言愈狂、以其孝廉也、遂據實奏聞、褫革究辨、搜查平日事蹟、得所著作、多不法語、坐誹謗、腰斬於市、咸以爲中分唐詩、蓋其識云、朱昆田題聖歎詩牋、有云、鍛冷嵇中散、鬻亡謝客兒、一牋遺墨在、腸斷是朱絲、亦似傷其死、余家藏聖歎評西廂記一部、間有所

又、金聖歎が非命に死する事を載す、狀頗る狂勃なり、或は謂ふ小説家は放誕誣罔多し、信するに足らざるなりと、其れ或は然らん、姑く録して以つて後考を俟つ、云、金聖歎の著す所、解唐詩五七言律、義理を論ずる無く、必ず割然中分し、上四句を前解と爲し、下四句を後解と爲す、穿鑿乖謬、當時の人戲に稱して腰斬唐詩と爲す、一日京師東四牌樓に行き、偶々内逼し、遂に街心に於て、袴を棍し遺矢す、其地は車馬交馳し、見る者駭怪せざる、坊卒怒て之を鞭つ、金も亦大に怒り、侈口毒罵し、金吾の處に達するを致し、之を拘訊す、言愈々狂、其孝廉なるを以て遂に實に據り奏聞し、褫革究辨し、平日の事蹟を搜查し、著作する所を得たり、不法の語多し、誹謗に坐し、市に腰斬せらる、咸な以爲へらく唐詩を中分するは、蓋、其の諷と云ふ、朱昆田、聖歎の詩牋に題して云へる有り、鍛は冷なり、嵇中散、鬻は亡ぶ、謝客兒、一牋遺墨在り、腸は斷つ、是れ朱絲と、亦其の死を傷むに似たり、余か家聖歎評の西廂記一部を藏す、間々謂はゆる不法の語あり、然りと雖、情語麗辭、膚を解き體に入る、字字劇だ妙なり、惜いかな細行を慎まず、卒に慘禍に罹れり、因是道人葛質、東都に寓居し、文を能くして、一時に名有り、詩を論ずるに至

謂不法語、雖然情語麗辭、解腐入髓、字字劇妙、惜哉不慎、細行、卒罹慘禍矣、因是道人萬賢寓居東都、能文有名、一時至論、詩則特喜聖歎、采、用其說、余嘗與書云、聖歎不遇屈于彼、而伸于此、身後得知己于海波千里外、蓋直述所見也。

大率詩句從橫豪宕者、使人駭想其學問浩博、新麗纖巧者、使人慕豔其才藻綺梅、平澹和易者、使人自然易感、情本至近、去人不遠、故易讀易解、迺又易感也。

感之至也、唯在諷誦、非俟譯義理後、而始生者、古人云、讀書百遍而義自見、余云、好句不用多讀、一誦則見。

悲歡情之質、笑啼情之容、聲音情之影、詩詞情之跡。

竹田莊詩話

りては則ち特に聖歎を喜び、其説を採用す、余嘗て書を與へて云ふ、聖歎不遇、彼に屈して此に伸ぶ、身後知己を海波千里の外に得たりと、蓋、直に見る所を述ぶるなり。

大率詩句縱橫豪宕の者は、人をして其學問浩博を駭想せしむ、新麗纖巧の者は、人をして其才藻綺梅を慕豔せしむ、平澹和易の者は、人をして自然に感じ易からしむ、情は本、至近、人を去る遠からず、故に讀み易く解し易く、迺ち又感し易し。

感の至りや、唯よ諷誦に在り、義理を繹ぬる後を俟ちて始めて生ずる者に非ず、古人云、讀書百遍にして義自ら見はると、余云ふ、好句多讀を用ひず、一誦すれば則ち見はる。

悲歡は情の質、笑啼は情の容、聲音は情の影、詩詞は情の跡。

二一

三百篇、半係里巷歌謠、雅不難解、世或爲難、以其名物詁訓、今日不同故也、夫古今人情、除悲歡笑啼四者、又無遁處、以意逆志、千載一日、何難解之有、世講楚辭、自從憂世思君而說、余則只認一情字耳。

原平仲梓韓偓集、余序其首、竝跋香奩、私以爲冬郎之解嘲文、會東都書賈方刻香奩、於是梓止本集、而香奩中轍故贅跋語於此、曰淵明老人、鐵石心腸、出以淡語冷句、舉世俱知、而不知其人、太至情也、古人謂忠孝節義、自情字內得來、蓋集中所載、閑情賦、及日暮天無雲一篇、風情流麗、絕無俗儒酸習氣、矣、昭明不會此義、妄論白璧微瑕、東坡因諂昭明云、此乃小兒強作解事者、蓋冬郎之於

三百篇、半は里巷歌謠に係る、雅より解し難からず、世或は難しと爲すは、其名物詁訓、今日同じからざるを以ての故なり、夫れ古今人情、悲歡笑啼四の者を除けば、又遁る處無し、哀を以て志を逆へば、千載一日、何の解し難きことか之れ有らん、世楚辭を講ずるに、世を憂へ君を思ふよりして説く、余は則ち只一の情の字を認むるのみ。

原平仲韓偓集を梓す、余其の首に序し、竝に香奩に跋し、私に以て冬郎の解嘲文と爲す、東都書賈方に香奩を刻するに會ふ、是に於て、梓本集に止る而して香奩中ごろ轍む、故に跋語を此に贅す、曰く、淵明老人、鐵石心腸、出だすに淡語冷句を以てす、世を擧げて俱に知る、而して其の人の太至情なるを知らざるなり、古人謂ふ忠孝節義、情の字の内より得來ると、蓋集中載する所の閑情賦、及び日暮天に雲無しの一篇、風情流麗、絶えて俗儒酸の習氣無し、昭明此の義を會せず、妄に論ず、白璧の微瑕なりと、東坡因て昭明を諂りて云、此れ乃ち小兒強いて事を解するを作す者と、蓋冬郎の香奩に於ける、亦其の類なり、昭宗、反て止だ論じて功臣と爲す、平生の著述、悲憤感慨、情君を忘れず、少陵と殆んど相伯仲す、其の間剩墨殘

香奩亦其類也。昭宗反正論爲功臣。平生著述悲憤感慨。情不忘君。與少陵殆相伯仲。其間剩墨殘筆。偶及俚紅倚翠。剪花刻月。諸麗語。人或毀之爲教淫。余特賞以爲精忠之所自來也。冬郎有知其謂之何。

鍾竟陵云。古人雖居邨僻。皆有素友。作鄉人。居鄉無此。非塵雜。則寂寞矣。予病居累歲。幸有素交六七。相共來往。觴咏日娛。不但晨夕切劇所得既多。又不使雪月花柳笑無聊也。今錄四人。曰角田廉夫。名簡。伊藤孟得名輔。世野原平仲。名衡。松岡信好。名只詩。

廉夫少登中井竹山先生之門。學有淵源。潛志經史。好古文辭。年僅過弱。所著有外史叢語等數書。爲詩雅整。邊幅濶大。不屑啾啾悲

筆。偶及俚紅倚翠。剪花刻月。諸麗語。及ぶ。人或は之を毀りて淫を教ゆと爲す。余特に賞して以て精忠の自て來る所と爲すなり。冬郎知る有らば。其れ之を何とか謂はん。

鍾竟陵云。古人邨僻に居ると雖。皆な素友の郷人と作る有り。郷に居て此無きは。塵雜に非んば。則ち寂寞なり。予病居累歲。幸に素交六七あり。相共に來往し。觴咏日に娛む。但に晨夕切劇し。得る所既に多きのみならず。又雪月花柳をして無聊を笑はしめず。今四人を錄す。曰く。角田廉夫。名は簡。伊藤孟得。名は輔。世野原平仲。名は衡。松岡信好。名は只詩。

廉夫少くして中井竹山先生の門に登り。學淵源あり。志を經史に潛め。古文辭を好む。年僅に弱に過ぎ。著す所外史叢語等數書あり。詩を爲る雅整。邊幅濶大。啾々として悲鳴し。蚯蚓の聲を作すを屑とせず。感遇九首語々感な

鳴作蚯蚓聲也。感遇九首、語語成實、如云「孔孟絲邈矣、周程張朱逝、處士各放恣、六藝多橫說、予見其於學有所適從、如云「古風寢弱響、滔滔競綺靡、正聲不可見、嗚呼吾孰歸、則又知其作文有所歸宿、如云「袍影獨浩歌、倏然發虛警、沈靜聖所嘉、躁動徒招青、予見其於道有所悟入、如云「淡然掃娥眉、不受一點塵、不作妖豔態、貞操磨那磷、則又知其處世有所自守矣、頃遊環翠園、賦雜咏十首、姑傳二章、云「不要響、不狗世、相伴何琴書、山之巖水之澁、月於遊花焉、慰訪詩僧入、宵羈身多病、目又翳、百家事不爲計、坎而止、盈而逝、處世憤憤、如匪澣衣、汨爾晷沒、蹇然鶴飛、硯田筆囁、無雙樂地、雲耕雨耨、一大政事、郊島

實なり、孔孟は縣邈たり、周程張朱は逝き、處士各々放恣し、六藝横説多し」と云ふが如き、予、其學に於けるに適從する所有るを見る、古風寢弱響を弼め、滔滔として綺靡を競ひ、正聲見る可からず、嗚呼吾孰にか歸せん」と云ふが如き、則ち又其文を作る歸宿する所有るを知る、影を抱き猶浩歌す、倏然として虚警を發す、沈靜は聖の嘉する所、躁動は徒に青を招くと云ふが如き、予其道に於ける悟入する所有るを見る、淡然として娥眉を掃ひ、一點の塵を受けず、妖豔の態を作さず、貞操磨するも那ぞ磷せんと云ふが如き、則ち又其世に處して自から守る所あるを知る、頃ごろ環翠園に遊び、雜咏十首を賦す、姑く二章を傳ふ、云「響を要せず世に狗はず、相伴ふは何ぞ、琴書畫、山の巖水の澁、月に遊び花に慰ふ、詩僧を訪ひ、宵羈に入り、身多病にして目又翳す、百家の事計を爲さず、坎して止り盈ちて逝く、世に處して憤々、澣が匪る衣の如し、汨爾として晷沒し、蹇然として鶴飛す、硯田筆囁、無雙の樂地、雲耕雨耨、一大政事、郊島薄待備に苦辛を嘗む、苦中に樂あり、味言ふ可からず、貧富命あり、何ぞ云云するに足らん。

薄律、備嘗苦辛、苦中有樂、味不可言、貧富有命、何足云云。

孟得信好二子、年未及冠、頗能詩、孟得以力學勝、信好以才情勝、凡古今傳稱以爲名句好聯者、孟得誦讀之、殆遍焉、爲詩初刻、意劉隨州、近日揉摩稍細、七律除夜云、塵煤全掃一堂清、松竹挿門春事成、燭影鐘聲留舊歲、垢顏蓬鬢入新正、點香自祭小詩卷、扶病且傳長命觥、自笑黃梁炊未了、明朝幻夢又新生、元旦云、群鴉飛起一聲鐘、曙色東南紫氣濃、村寂燈光尙冬意、城諱人語總春容、煙棧輕度未勝織、柳縷稍柔似欲縫、自此鶯花多韻事、詩壇塵戰屬毫鋒、立秋云、朝來何處最凄清、乃是水邊竹外極、水已貯秋非昨日、竹

竹田莊詩話

孟得信好の二子、年未だ冠するに及ばず、頗る詩を能くす、孟得は力學を以て勝ち、信好は才情を以て勝つ、凡そ古今傳稱して以て名句好聯と爲す者は、孟得之を誦讀して殆んど遍し、詩を爲るに、初め劉隨州に刻意す、近日揉摩稍細し、七律除夜に云ふ、塵煤全く掃ふて一堂清し、松竹門に挿んで春事成る、燭影鐘聲舊歲を留め、垢顏蓬鬢新正に入る、香を點じて自ら祭る小詩卷、病を扶けて且つ傳ふ長命觥、自ら笑ふ黃梁炊いで未だ了らず、明朝幻夢又新に生ず、元旦に云、群鴉飛び起つ一聲の鐘、曙色東南紫氣濃なり、村は寂にして燈光尙ほ冬意、城は諱して人語總て春容、煙棧軽く度りて未だ織るに勝へず、柳縷稍柔にして縫はんと欲するに似たり、此れ自ら鶯花韻事多く、詩壇の塵戰毫鋒に屬す、立秋に云、朝來何の處か最も凄清、乃ち是れ水邊竹外の極、水已に秋を貯へて昨日に非ず、竹先づ夏を脱して新聲を送る、晚涼體を浸して扇手を辭し、及氣心を澄まして書暗に入る、是れ従り東西山を討して好し、一雙の游履稍輕きを知る、七絶、塞

先脫夏送新聲、晚涼浸體扇辭、手夜氣澄、心
 書入晴從、是東西討山好、一雙游履稍知輕、
 七絕、寒塘云、荷老柳枯不附霜、風聲水色入、
 荒涼、淡天三四五行雁斜帶落暉、下曲塘、夏
 畫云、滿樹蟬聲向午多、詩魂避熱入南柯、翠
 禽欺得人眠去、池面啣魚款款過、竹下泊舟
 圖云、萬箇幽篁曲澗中、梢垂葉掩小流通、漁
 郎解結清涼夢、綠影多邊泊釣舟。

信好幼喪父、稍長多病、羸瘠體不勝衣、其母
 過愛不敢教書、年甫十六、學詩於予、沉思刻
 苦、一字不苟、雖小律亦踰月始成、同社會賦
 衆作既畢、顧叩信好、其所得僅不過一句、若
 一聯、澄心靜慮、暑無競色、嘗懷詩卷造謁紫
 溟翁、翁稱善、批卷後云、斯人才思與時人霄

塘に云、荷老ひ柳枯れて霜に耐へず、風聲水色荒涼に入
 る、淡天三四五行の雁斜に落暉を帯びて曲塘に下る、夏
 畫に云、滿樹の蟬聲午に向つて多し、詩魂熱を避けて南
 柯に入る、翠禽人の眠り去るを欺き得て、池面魚を啣で
 款々過ぐ、竹下舟を泊する圖に云、萬箇の幽篁曲澗の中、
 梢垂れ葉掩ふて小流通す、漁郎結ぶことを解す清涼の
 夢、綠影多き邊に釣舟を泊す。

信好幼にして父を喪ひ、稍長じて多病羸瘠、體衣に勝へ
 ず、其母過愛し敢て書を教へず、年甫めて十六、詩を予に
 學ぶ、沈思刻苦、一字苟もせず、小律と雖、亦踰月にして始
 て成る、同社會賦、衆作既に畢り、顧みて信好を叩けば、其
 得る所僅に一句若くは一聯に過ぎず、澄心靜慮、暑は競
 色無し、嘗て詩卷を懷いて紫溟翁に造謁す、翁善と稱し、
 卷後に批して云、斯の人才思時人と霄壤なり、他日必ず
 李長吉たらんと、其言實に誣ひずと爲す、送別に云、古に

壤他日必爲李長吉、其言實爲不誣也、送別
 云、古稱消魂、此是時、黯然分手、豈無思、騰空
 野馬春風弱、就路行人芳艸滋、向後新添愁
 裏緒、以來唯有夢中期、我心練漉爾知否、悲
 莫悲、今生別離、池上云、宿霧屯雲滑欲流、胡
 牀倦坐向池頭、人忘機處鷓鴣能狎、客不到時
 竹自幽、暝且暝、今煙外夕、凄還凄矣、雨中秋
 此心調得常無事、一部楞伽更那求、又摘句
 云、一夜期兼人齟齬、三更起與月彷徨、舊醅
 無事醉來醉、新句有時成、則成、菓生幾陣惹
 悲雨、花落雲時方便風、蓑笠影迷三徑草、斧
 斤聲出一溪煙、歲月無邊全似水、身心處世
 半如雲、竝有情致、讀畢、悽然。

平仲業醫學於琴山翁、研究方書、日夜不止、

竹田莊論語

稱予消魂は此れ是の時、黯然手を分つ豈に思ふ無からん
 や、空に騰する野馬春風弱く、路に就く行人芳艸滋し、向
 後新に添ふ愁裏の緒以來唯夢中の期あり、我心練漉す
 爾知るや否や、悲きは生別離より悲きは莫し、池上に云、
 「宿霧屯雲滑にして流れんと欲す、胡牀倦坐して池頭に
 向ふ、人機を忘るゝ處鷓鴣能く狎れ客到らざる時竹自ら
 幽なり、暝にして且つ暝たり煙外の夕、凄にして還た凄
 たり雨中の秋、此心調し得て常に無事、一部の楞伽更に
 那ぞ求めん、又摘句に云、一夜の期人と齟齬し、三更起
 て月と彷徨す、舊醅無事にして酔ひ來れば酔ひ、新句時
 有て成れば則ち成る、菓は生ず幾陣惹悲の雨、花は落つ
 雲時方便の風、蓑笠影は迷ふ三徑の草、斧斤聲は出づ、一
 溪の煙、歲月遷ること無く全く水に似たり、身心世に處
 して半は雲の如し」と、竝に情致有り、讀み畢りて悽然た
 り。

平仲、醫を業とす、琴山翁に學び、方書を研究して、日夜止

二七

詩其餘事、多流卒易、不經意者過半矣、加之進取甚急、尙敏貪多、予常面折其非、不從也、近日歸嚮晚唐、手較李賀、溫庭筠、姚合、韓偓、皮陸諸集、附諸劄記、今得七律聲口微似、香奩者一首、錄之、次韻春夜云、未送春風到、藝林、硯池半被夜冰侵、月猶澹泊春慵淺、簾已迷離燭影深、尋夢背屏且凝坐、避人繞柱只低吟、詩成自覺雲相似、過盡眼前不入心、訪梅一絕亦可觀、云、山頭山尾遠過盡、草鞋乍到水之濱、橫斜映竹一枝出、認得離騷經外春、又有身如露底凄凉草、心似風前澹泊花、一聯、悽惋可愛。

まず、詩は其餘事なり、多く卒易に流る、意を經ざる者過半、之に加ふるに進取甚だ急に、敏を尙び多きを貪る、予常に其非を面折す、從はざるなり、近日晚唐に歸嚮し、手づから李賀、溫庭筠、姚合、韓偓、皮陸諸集を較し、諸を劄記に附す、今七律の聲口微に香奩に似たる者一首を得たり、之を錄す、春夜に次韻して云、未だ春風を送り、藝林に到らず、硯池半は夜氷に侵さる、月猶ほ澹泊春慵淺く、簾已に迷離燭影深し、夢を尋ね屏に背いて且つ凝坐し、人を避け柱を繞りて只低吟す、詩成りて自ら覺ふ雲相似たるを、眼前を過盡して心に入らず、梅を訪ふ一絕も亦觀る可し、云、山頭山尾遠く過盡し、草鞋乍ち到る水の濱、横斜竹に映じて一枝出で、認め得たり、離騷經外の春、又、身は露底凄凉の草の如く、心は風前澹泊の花に似たりの一聯あり、悽惋愛す可し。

昔予、樂天の詩を讀み、慨然として感悟す、當時自から謂ふ、得る所頗多し、當に格調和平、往來の學者をして志微嗟殺の音無から使むるのみならず、略ぼ數句を表

殺之音、略表數句、告同病相憂者云、誦罷藥之作、則知病之近道、曰、此身不要、全強健、強健多生、人我心、誦見元九悼亡詩之作、而悟情之可遣、曰、人間此病治無藥、唯有楞伽二卷經、誦龜兒咏詩之作、則知苦吟之多損人、曰、莫學二郎吟太苦、纔年四十鬢如霜、誦覽鏡喜老之作、而悟衰老之不足憂、曰、不、老、即須、天、不、天、即、須、老、晚、衰、勝、早、天、此、理、決、不、疑、又、作、讀、長、慶、集、七、古、一、篇、以、述、懷、云、七、八、年、前、始、咏、吟、暗、生、塵、世、厭、離、心、爾、來、流、轉、東、西、路、單、身、得、備、嘗、浮、沈、今、日、扶、病、又、吟、咏、倍、知、厭、離、入、骨、深、行、文、不、必、要、奇、險、情、真、能、徹、石、與、金、至、樂、處、藏、至、悲、旨、極、榮、地、包、極、衰、理、狂、言、綺、語、七、十、卷、成、佛、因、緣、存、此、裏、小、蠻、細、腰

竹田莊詩話

し、同病相憂ふる者に告ぐと云ふ、藥を罷むるの作を誦して、則ち病の道に近きを知る、曰く、此の身、全く強健なるを要せず、強健なれば多く人我の心を生ず、元九の悼亡の詩を見るの作を誦し、而して情の遣る可きを悟る、曰く、人間此の病治するに藥無く、唯楞伽二卷の經有り、龜兒詩を咏するの作を誦し、則ち苦吟の多く人を損するを知る、曰く、學ぶ莫れ二郎の吟太だ苦むを、纔に年四十にして鬢霜の如し、鏡を覽て老を喜ぶの作を誦して、衰老の憂ふるに足らざるを悟る、曰く、老ひされば即ち須く天すべし、天せざれば即ち須く老ゆべし、晚衰は早天に勝れり、此の理決して疑はず、又、長慶集を讀む七古一篇を作り、以て懷を述ぶ、云、七八年の前始めて咏吟す、暗に塵世厭離の心を生ず、爾來流轉す東西の路、單身備に浮沈を嘗むることを得たり、今日病を扶けて今吟咏す、倍厭離の骨に入るの深きを知る、文を行は必ずしも奇險を要せず、情真なれば能く石と金とに徹す、至樂の處には至悲の旨を藏し、極榮の地には極衰の理を包む、狂言綺語七十卷、成佛の因緣此の裏に存す、小蠻の細腰、樊素の脣、料り知る天文化現の身、池上の雙鶴、門前の駱他生は應さに變して人と爲ることを得べし、之を聽けば煩

樊素、屑料知天女化現身、池上雙鶴門前路、
 他生應得變爲人、聽之截斷煩惱苦、咏之解
 脫生死輪、信口吟了千萬句、漸熄殘燈冷、香
 獸、信梅茫茫東海東、生晚落在長慶後、一吟
 一哭天欲明、復沾前淚未乾袖。
 廉夫寓大阪日、寄示中井介菴客中雜題八
 首、茲錄其二云、朱雀門南第幾街、繽紛寶蓋
 逐驕颺、纔餘小屋無塵及、著得幽人與世乖、
 烹茗焚香送微醉、栽花移石協閑懷、曉窓別
 有欣然處、月白霜清秋滿階、風桐落盡絡緯
 鳴、小圃秋光分外清、病髮經愁易種種、閑身
 處世豈營營、殘茶靜室留僧算、古畫明窓與
 客評、偶記晚來看月約、掃氈移榻近南榮、又
 就其中截取好句綴成二絕、風趣頗似讀元

三〇
 惱の苦みを截斷し、之を咏すれば生死の輪を解脱す、口
 に信せて吟了る千萬句、漸く殘燈を熄して香獸冷な
 り、信に梅ゆ茫茫たる東海の東に、生るゝ晩くして落ち
 て長慶の後に在り、一吟一哭天明けんと欲す、復沾ほす
 前涙の未だ乾かさる袖を。

廉夫、大阪に寓する日、中井介菴客中の雜題八首を寄示
 す、茲に其二を録す、云、朱雀門の南第幾街、繽紛たる寶蓋
 驕颺を逐ふ、纔に小屋を餘して塵の及ぶ無く、幽人を著
 け得て世と乖く、茗を烹香を焚き微醉を送り、花を栽え
 石を移して閑懷に協ふ、曉窓別に欣然の處有り、月白く
 霜清くして秋階に滿つ、風桐落ち盡くして絡緯鳴き、小
 圃の秋光分外に清し、病髮愁を経て種々なり易く、閑身
 世に處して豈營々せんや、殘茶靜室僧を留めて算し、古
 畫明窓客と評す、偶記す晚來月を看るの約、氈を掃ひ榻
 を移して南榮に近く、又其の中に就て好句を截取し、綴
 りて二絶と成す、風趣頗る元詩を讀むに似たり、合作と
 稱するに足る、云、稍覺ふ病軀の輕くして且つ便なるを、
 好し閑歩を將て閑眠に代ふ、茶を裏んで時に清泉に

詩、足稱合作云、稍覺病軀輕且便、好將閑步代閑眠、裏茶時就清泉煎、多在殘篔簹柳邊、臨餘墨帖四三行、竹逕秋寒鳥臥霜、偶有家人寄書到、併封盈尺小衣箱、介菴名會弘、字伯毅、竹山先生之男、其詩不襲家法、別出機杼、新秀細潤可喜也、廉夫云、介菴夙質穎異、一夜作賦十篇、名赫一時、短簡尺牘、最有情致、然生平構思甚苦、有時或嘔心血、殆死者數次、年未四十竟逝。

廉夫又示、冥陰略稿、乃竹山先生集也、充實有餘、風趣稍乏、蓋不以詩人自處矣、自叙有云、今之學夫詩者、要爲其可爲、而不爲其不可爲、是已、又云、居士從小潛心於經術、以餘力游於詩藝、亦唯擒事之實、運以趣之真、而

就いて煮る、多くは殘篔簹柳の邊に在り、臨し餘す墨帖四三行、竹逕秋寒くして鳥、霜に臥す、偶、家人の書を寄せて到る有り、併せて封す盈尺の小衣箱、介菴、名は會弘、字は伯毅、竹山先生の男なり、其の詩、家法を襲がず、別に機杼を出だす、新秀細潤、喜ぶ可きなり、廉夫云ふ、介菴夙質穎異なり、一夜賦を作る十篇、名、一時に赫す、短簡尺牘、最も情致有り、然ども生平思を構する甚だ苦し、時有りて或は心血を嘔す、殆ど死せんとすること數次なり、年未だ四十ならずして竟に逝く。

廉夫又冥陰略稿を示す、乃ち竹山先生の集なり、充實餘り有り、風趣稍乏し、蓋、詩人を以て自ら處らず、自叙に云へる有り、今、夫の詩を學ぶ者は、要するに其爲す可きを爲して、而して其爲す可からざるを爲さざる、是れのみ、又云ふ、居士少き従り、心を經術に潛め、餘力を以て詩藝に遊ぶ、亦唯事の實を擒へ、運らすに趣の真を以てして止む、深く手、人の臍廡に依托して、夸訛不根の辭を爲

止、深恥、手依托、人牆、廡爲、夸毗、不根之辭、矣、
 今誦其言、而詩可知也、姑從集中採錄、頗能
 婉曲者、七律、燕燕雌雄吟云、雌雄燕子皂衣
 齊、雌去雄來各啄泥、雄定巢時待雌宿、雌生
 卵日喚雄啼、新兒雌哺雄相助、故國雄歸雌
 不迷、雄子明年率雌後、雌雛何處逐雄栖、六
 言、山家云、劇倦雲間藥畦、繙餘石上花曆、一
 聲驚夢清猿、宛似僊翁鐵笛、七絕、宮怨云、清
 鑿搖夢響丁丁、錯謂君王向此經、不識綠陰
 多、鬪雀牡丹花上觸金鈴、寒塘曲云、冬日野
 塘風獵獵、蓮房菱角亂參差、村童不厭指將
 墮、冰底寒魚又得時、以上諸作、自具唐人遺
 響。

夏日飲水、冬日飲湯、古人的生活大是簡便、後

すを恥づ、今其言を誦して、詩、知る可きなり、姑く集中より頗る能く婉曲の者を採録す、七律、燕燕雌雄の吟に云、「雌雄の燕子皂衣齊し、雌去り雄來りて各泥を啄む、雄、巢を定る時雌を待て宿し、雌卵を生ずる日雄を喚んで啼く、新兒雌哺して雄相助け、故國雄歸て雌迷はず、雄子明年雌を率いて後、雌雛何の處にか雄を逐ふて栖まん、」六言、山家に云ふ、劇り倦む雲間の藥畦、繙き餘ます石上の花曆、一聲、夢を驚かす清猿、宛もひ翁の鐵笛に似たり、七絶、宮怨に云、清鑿夢を搖かして響丁々、錯りて謂ふ君王此に向つて經す、識らず綠陰鬪雀多し、牡丹花上金鈴に觸る、寒塘の曲に云、「冬日野塘風獵々、蓮房菱角亂れて參差、村童厭はず指の將さに墮ちんとするを、冰底の寒魚又し得る時、」以上の諸作は、自ら唐人の遺響を具す。

夏日は水を飲み、冬日は湯を飲む、古人の生活大に是れ

人狡黠、代湯以茶、遂生紛紜、雖滌煩驅睡、實策其勳、然不如胸中清虛、無一物之可蕩滌也、尙寐無覺、最爲吾輩妙案、又奚用驅逐爲予也、生晚、五内旣爲茶氣所浸染、一旦不能遽然出離苦味、鄉中故茶法亦不可不講也、近詞人韻士、專崇煎茶、不喜點茶、然陸羽之所傳、盧仝之所咏、唐宋詩賦所稱、綠塵玉雪、乳花霞脚、及其神工妙用、咸謂點茶也、親試擊拂、而後始見古人措辭體物之精矣。

簡便なり、後人狡黠、湯に代ふるに茶を以てし、遂に紛紜を生ず、煩を滌ひ睡を驅り、實に其勳を策すと雖、然も胸中清虛、一物の蕩滌す可き無には如かざるなり、尙くば寐ね覺むること無き、最も吾輩の妙案と爲す、又奚ぞ驅逐を用ふるを爲ん。

予や生るゝ晚し、五内旣に茶氣に浸染せらる、一旦遽然として苦味郷中を出離すること能はず、故に茶法も亦講ぜざる可からざるなり。

近ごろ詞人韻士専ら煎茶を崇び、點茶を喜ばず、然ども陸羽の傳ふる所、盧仝の咏する所、唐宋詩賦の稱する所、綠塵玉雪、乳花霞脚、及び其神工妙用は、咸な點茶を謂ふなり、親ら擊拂を試みて、而して後ち始めて古人の辭を措き物を體するの精を見る。

竹田莊詩話終

日本詩話叢書

三四